

個人山行・行仙宿世回

実施日 平成27年5月21日(木) 快晴

参加者 玉岡 明・玉岡 憲明

前夜に於て息子の明が「お父さん、明日、行仙宿へ行ってみようか」と
言い出した。体調必ずしも充分ではなかったが、叩角、親の気持
を押し量つて誘そくれたので、この機会に

(一) 行者堂に帰つていゝ篇類の寸法を測り、九州・柳川市の
吉岡賢海師にお届けして、文などを彫る。頂き千糸院の
不勤堂に巻けて置くこと。

(二) 一ヶ年半旅りに其の後の状況を写真したいこと。

(三) 菩提堂の事案から、地蔵堂一師の本堂寺をとりこめて
競かきしるゝことなどの目的で、時お祭する。

去行中、息子曰く「お父さん、私の体調は一時回復した。呼吸器で
引越すことはいくらと公を押し。あまり遠くは行かず、内心では
日帰り可能と踏会った。

登山口にはお時に着いた。去る5月4日、行仙宿泊の某女がこの

階段で転落し、左足10数針を縫う事故のみで、目下退

中崎支の遭難対策の一助にと、階段に滑り止めの砂を撒き

その上にテープを貼ります。予摺りにもテープを貼るなど、万全の策を

施してゆくべきである。対策も大抵おのり利用者自身も、慎重に

踏んで世間のものである。

階段を上つてからストックを杖代わりに一歩一歩「慎重に

上る。オーベントにはフルシートがかけられていた。これは白急な

勾配のゆるやかな径になった。傾斜のきつい斜面で径を造るの

きびしく急なジグザグ径となる。一丁所、杉の古木の通行をさまた

げることになり、初田政治さん(故人)の自家用のチェーンソーを打

と、邪魔な部分を切り取ってゆくもの。いつも「通す」度に

依口に平び多干して初田さんの遺言を記している。

杉林を板けすと紺杉林に変わって、今と成りの者葉、石笹木の

目を今と目させてくいる。私の紅葉も、この折々の方々好まれている。

横々の谷のうねり板橋と初夏の夕陽が照らす明るい斜面で

祖界の松のこころ 朝う 雲つらぬい日本 暗々ひびいたる 八白を奈

の彼方の空に早や雲の通るまにひびいてこえ。

カニペンテでひとと入れる。この木路は句のともひえ野の鶴の

吊りひびく。曾て 電海用舟の会社が 仰山の松樹木を

頂て 各町の道普請に使わせてせう。このペンテもその一ひび

作して昔をものひびく。

おふれと早いペンテでニニまじり上りて来た。この川でシスターン

の目ごやひびいたる。行仙り屋はもう午の鐘を至近距離ひびく。

鉄橋の下を通ると、水端の峪海流にやまを来た。このトラバース

ルートは長鉄筋を打込んで長鉄筋の間に土砂防止甲に使そ

いの金細と土不台江のさびつて世うて。この土砂山崩れ止めは

してはどののと揺葉とひびいたる。金細を持ち上げよりのひび

苦みで 松岡杖と並べる方のらくひびいたる。その杖木を

土砂止めと使そいふ。

秋山口のう丁度二軒目の10軒は行仙社に別居した。人の手は
せず、障のる窓や田氣でしすまっていた。

両手と合わせて諸尊護聖に午と今のせいの経を奉唱し
三井寺福家長更位下印持多えなるの尊顔の寸幅を測り
クマラにゆめてせう。

よく詰廻るっていた言因脚の折の倚番は僅のとなそいた。

今斗の冬は仙針にのり為氣のまゝとストープを脱中じやつ
折と替いの体果くじ。ストープの煙のあらいのひけむくはるい
又面、折をいのた然やりのと違て火刀かゆい、欠其のみる。

あまり然氣を体懐させると火突の窓田らもりのわまひ、マイアス
面のみこのび一度検付すまきかひなわこつか

オミの詳理、池宇斬下町の下件作、本能寺の上、下二巻

日いま一、半空にぼんやりとあつていゝもみで、対峙よここ、一と。

山は秋よりしも、下りに事枚の取まゐい

秋の扇談長は、油印サインで、西日扇、鞠腰と、のつちりて

固めてくわす。

月末には三井幹雄君と河野芳太郎君の打合せの折入社を
研修に行仙社に合社とすること。明日はニースに将来

の業外である。其の通り、行仙社と面談の名前は一階午入れ

と下書きのことである。只木の鉛筆をけむは流水の太きこと

呼吸をさるらりびるの。行仙社の上の広い平地の。おつちり

ーから下書き目の石塊やコンクリートの固まりを二斗をいりかして

かつらりと針をさす牛もさすものである。

リ好早々に下山の途にたつた。電線用鉄さすのやねをいん。

おり母の面おもはると平に流着るとキキと音をたてていた。

明日のおつちりと確保されて、お心と山を下ると、一度地面

尻と着けこと上の上のの踏んでみる。その上へは平は、拾いの

体み端である。

お花が、お花の命令には、無事、車止りに降り立つる。

玉岡義明記

5